

卷 頭 言

龍谷大学名誉教授百濟康義先生がご往生されたのは、平成十六年五月十二日のことでありました。停年退職まで十年も残しての天逝であります。小職は高校時代に病氣をした関係上、大学入学は三年遅れたましたが百濟先生とは同じ年齢でした。学年でこそ三年先輩でしたが、昭和五十八年四月には、二人同時に専任講師として龍大へ採用され、助教授・教授として共に同じ時期に昇進してきました。幼いときに病弱であった小生が残って、健康であった百濟先生が先に往生なさるとは、私にとって表現しがたい世の無常を感じます。

本号は百濟先生の追悼号として有縁の会員が投稿してくれました。中でも百濟先生と学問的に大変因縁の深い両名誉教授、恩師の井ノ口泰淳先生並びに元学長の上山大峻先生から追悼文を戴く事ができて本号を飾っていただきました。なによりも有り難いことです。ここに厚く御礼を申し上げます。

百濟先生の研究業績欄にもありますように、先生の研究は大谷探検隊の将来資料を中心とした国際的規模の研究でした。その評価は上山先生の追悼文に詳しく紹介されていますので、ここでは省略させていただきます。

ただ、私たちにとって少し慰めになるのは、今年四月に龍谷大学が百濟先生に名誉教授の名称を贈ったことです。これまでの龍大の規程では、その資格はあっても在職中に亡くなられた場合は名誉教授号を贈ることが出来ませんでした。しかし百濟先生による龍谷大学への貢献を考えましたとき、追号であるとは云え、是非とも名誉教授号を贈るべきだという当時の文学部長中川法城先生の主張が認められ、今年四月にやっとその規程が改正されたのです。中川先生へも深甚の謝意を申し上げたいと思います。

ところで、私が百濟先生と会話した忘れることの出来ない思い出を書いておきたいと思います。

先生が、癌と宣告されて三度目の手術をしなければならぬ時のことです。先生は「手術を受けない」と言い

出されたのです。その理由を聞きますと「当初、体重が六十kgあったが、一度手術を受けると十kgも減ってしまい、今では四十kgになっている。今回手術を受けると三十kgになってしまうだろう。それでは教壇に立つだけの体力が保てない。それを思うと今回の手術をやめ、命のある限り教壇に立つて、命尽きれば、そのままお浄土に寄せていただくのが私の願いだ」という内容でした。

私はこの驚くべき言葉を聞いて三つの意味で大きく心打たれたのです。

一つは「自分の死」を淡々と語っておられる点でした。こんなにもこだわり無く「自己の死」を語られるものだろうか、と驚きながらも「そこまで覚悟されているのか」という思いでした。

二つには「死の直前まで学生と共にいたい」という教員としての熱い思いを先生は最後まで持つておられる点でした。これは自分の研究を少しでも学生と分かち合いたいとの思いからであつたのでしょう。この言葉こそ、まさに教師としての鑑であると思つたものです。

三つには「念仏者の姿」を見せていただいたように思います。正直いって、先生との平生の会話の中からは、先生が「お念仏者であつた」という意識はあまり感じられませんでした。しかし、その時は違つていたのです。自分の死に関して、笑顔でこれらの内容を話されました。「お念仏に全てを委ねておられる」先生の姿がそこにありました。むしろ、その話を聞いている私の方が先生の前に居るのが辛く感じました。私は涙ながらに先生の研究室を急いで後にしたのです。

これらを今静かに思い返しますと、百濟先生は私たちに、仏教を学ぶ目的を、自らの命をもつて教えてくださったように思います。百濟先生、本当に有り難うございました。

平成十九年六月

龍谷仏教学会長

浅田 正博